

『血潮、途切れることなく』

樋口シユ

Piece 1	風景	窓
Piece 2	記憶	洋館の女主人
Piece 3	詩	「瞼のわたし」
Piece 4	記憶	ナイチンゲール
Piece 5	記憶	銀色黒猫
Piece 6	詩	「土曜日、ヘイタクシー」
Piece 7	記憶	蚊
Piece 8	風景	空
Piece 9	記憶	研究者
Piece 10	風景	鐘
Piece 11	記憶	洋館の女主人
Piece 12	詩	「瞼の宇宙」
Piece 13	風景	蝶

大きな窓がひとつ。

常葉樹の枝がちらりと窓の外に見える。
たぶん、ずいぶんと大きな高い常葉樹。
そのてっぺんが見える。

なんの木だろう。

なんだってかまわない。

枝には青々と、青々としてる葉。

部屋の中にはソファがひとつ。

揺り椅子かもしれない。

ゆったりとうたた寝ができそうなものが、ひとつだけ。

まだ誰もいない。

ざあっと常葉樹の葉が揺れる。
風。

一陣の風が、
バタリと大きな窓を開く。

その風は、別のものも運んできた。

風に乗って、

窓からひょっこりそれが顔を見せる。

女の顔をした、

一匹の蚊。

だろうか。

それともただ単に、女なのかもしれない。
それにしても妙だけれど。

常葉樹のてっぺんの葉っぱをひとなで出来るような人間なぞ、
いやしない。

だから、蚊だろう。

ほら、飛んでくる。

腹はもういっぱいのかせに、

それでもまだ、

赤い血を探して、

とどまる。

Piece 2 記憶 洋館の女主人

女主人 あら、

あのゆったりとした椅子に座る女が手首を見た。

女主人 いやだわ、蚊。

ふっと手首から蚊が飛び去る。

女、目で追いかけてパチンと、

女主人 そんな季節じゃないのに。どこか……

蚊を叩くのを、やめた。

女主人 どこから。

開かれた窓を見る。

女主人 どこから。

女、自分の声と言葉を考えてみた。

女主人 どこ。

自分が座っている椅子を見る。

女主人 どこ。

自分がいる部屋を見渡す。

女主人 どこなの。

どうも実感がない。

女主人 あたし、

と口にして、自分の指に止まった蚊をじっと見た。

女主人 あたし。

胡蝶の夢

ならぬ

蚊となる夢を見た

夢がわたしか

わたしが夢か

蚊がわたしか

わたしが蚊なのか

さあ誰が答えられるか

瞼閉じたあとのこと

さあ誰が答えられるか

昨日の記憶

誰が教えてくれるか

わたしが夢か

夢がわたしか

蚊がわたしか

わたしが蚊なのか

どこから来て

どこへ行くのか

瞼閉じたあとのこと

さあ誰が

答えられるか

明日の太陽

ま

ま

ま

ま

ま

まぶしさを

い

い

い

い

い

いつ見たか

そ

そ

そ

そ

そ
その記憶

だ

だ

だ

だ

だ

誰がわたしで

わ

わ

わ

わ

わ

わたしが誰か

あ

あ

あ

あ

あ

あかい血潮

め

め

め

め

め

めぐる体はどこにある

胡蝶の夢

ならぬ

蚊となる夢を見た

夢がわたしか

わたしが夢か

蚊がわたしか

わたしが蚊なのか

さあ誰が答えらえるか

ドオン。

遠くで聞こえるのは、大砲か、銃撃か。

ナイチンゲールのような白い服を着た女、汗を拭った。
真夏のジャングル。

看護に追われている。

看護師
空気が、悪い。

また汗が額から吹き出る。
こぼれたため息は暑さからなのか、
絶望からなのか。

看護師
足りない。足りない足りないなんも足りない。

爆撃の音とは違って、
小さな小さな音がした。
震える羽音。
ひゅっと、看護師の耳元に蚊が飛んだのか。

看護師
ちゅっと、蚊帳に穴あいてんじゃないの。あっちもこっちもマラリアでやられてんだから。

近くの同僚に言ったのか、いや。
健常者はただひとりだから、
きつとひとりごとなのか。

蚊は看護師のまわりをウロウロと飛ぶ。

看護師
蚊帳は大事。

また、吹き出す汗を拭った。

看護師
ねえ聞こえる？

たぶん、患者に声をかけたのだろう。

看護師
聞こえてるね。痛むけど我慢して、我慢だよ。しょうがないよ切るしかないんだから切

りたかないわこっちゃだって。だめ、ほっておいたらそれこそ感染でアウト。我慢、して、

重症の患者の手だか、足だかを切除するしかないのだろう。

看護師 我慢するのよ、我慢。

看護師は細い体を重しにするように。

看護師 が、まん、

人の体が壊れる音が聞こえる。

看護師の耳には重症患者の痛みの声も聞こえているだろう、が。

看護師 して、

目を背けない。

看護師 泣くな。

泣きたいのは、

看護師 泣くな。

看護師のほうだ。

看護師 泣くな。

ゴトンと、

切り離された人間だったはずの一部が転がる。

と、

看護師の耳元に蚊が飛ぶ。

看護師、払う。

払っても払っても蚊は飛ぶ。

銃撃戦の真っ只中であるというのに。

看護師には、その蚊の羽音だけがしか聞こえない。

看護師、小さく小さくつぶやいた。

看護師 うるさい。

羽音が飛び回る。

看護師 うるさい。うるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさい。

パチンと頬を叩く。

が、逃す。

看護師、自分が泣いていることに気がつく。

ゆらりと、

小さな炎が見えた。

もう額から汗は吹き出ない。

看護師 戴帽式ね、綺麗なんだ。ロウソクが揺れて。戴帽式はね、儀式だから、ロウソクも、儀式。消さないように、そっと、覗くのね。オレンジ色の、その灯火の奥の、ね、ずっとずっと奥にね、見つける。働いている自分を、見つける。ああ、これだって。私はこうやって生きていくんだって。ずっとこの火を灯し続け……

ドン。

微かな爆撃の音の振動で、

ロウソクの小さな炎が揺らぐ。

ドン。

ドン。

ドン。

爆撃は激しさを増して、

ささやかな炎は、

看護師 あ。

ふっと消えると砲弾の嵐。

重症患者たちの苦痛の声。

痛いよせんせい。

くるしいよせんせい。

戻りたくないよせんせい。

もういいよせんせい。

もういいからせんせい。

もう。

看護師 こんなこと。

自分の手を見る。

看護師 看護師がすることじゃないのに。

血を白い服で拭う。

看護師 あいつらさっさと逃げちゃったから、

もういいから。

もういいよ。

もういいから。

もう戻りたくないから。

戻らなきゃいけないんだけど。

ズドンとさ、せんせい。

もういいよ。

重症患者はもちろん兵士たち。

うめき声の合唱。

看護師 仕方ない。

看護師、医療器具ではない、

持つべきものではないモノを手にする。

看護師 ほんとは逃げたいけどもうトラックないし地図もないし物資も不足しすぎだし麻酔なしでこんなことしたいわけじゃないし死ぬために手当てしたいわけでもないし掴んでるのが皮膚か布か内臓かわかんないし夢かと思って起きるけどやっぱ手は汚れてるし軍医殿患者を残してどこにいかれるんですか仕方ないだらうあとは君がなんとかしたまえ私が私になにが出来るっていうんですか知らんよそんなことは君に一任する逃げるな逃げるな逃げるな聞こえないのあの声が、

もういいよ。

もう眠りたい。

もういいよ。

せんせい。

看護師 聞こえてるけど、

看護師、構える。

看護師 どうしようもないんだもん。仕方ないから。

マシンガンを重症患者の兵士たちへと向け、

看護師 もう、

照準を定める。

看護師 いいよね。

もういいから。

もういいよ。

もう戻りたくないから。

もういいんだよ。

もういいから。

もういいね。

もう

もう

もう

看護師、引き金に人差し指をかける。

もういいよ。

もういいよ。

もういいよ。

もういいよ。

もういい、

引き金を引こうとした瞬間、

頬に手をやる。

看護師 かゆ。

ぽつりと小さく赤く膨れ上がる頬に手をやる。

痛みと死に麻痺した世界のなかで、

看護師 こんな時なのに、かゆい。かゆい。かゆい。

痒みに生を見つけた。

看護師 まだだよ。まだ。

ゆっくりとマシンガンを下ろす。

看護師 まだ、まだ、私、まだ、

ゴトンとマシンガンを捨てる。

看護師 まだ人間だ。

砲弾激しい向こうを見る。

止むことなどない。

止んだことなど、なかったかもしれない。

看護師、目をそらすわけではない。

止むことのない砲弾を見据えながらも、

看護師 ねえ、聞こえてる？ 聞こえてるよね。まだ大丈夫だね。まだ生けるね。

重症患者に声をかける。

ううん。

看護師の耳のすぐそばで、また蚊が飛んだ。

看護師、蚊を目で追う。

が、さっきみたいにパチンと叩こうとはしない。

目で追って、

看護師、ニツと笑う。

看護師 あれむかつくよねえ。

瀕死の兵士たちに世間話をする。

砲弾のさなかに。

まるで平常時のように。

しかし手元は応急処置を続ける。

看護師 蚊に刺されたところ、子どものころ爪でバッテンつけるの。おまじないみたいに。なんでみんなやってたんだろ。ぜんっぜん効き目ないの分かってんのにこうやって。

看護師、頬に爪痕つける。

看護師　こんなちっぽけなぼっちりのくせに痒くて痒くて、人の血勝手に吸って代わりにこんな痒み残して、でも大抵逃げられるからむかつくの。真夏の寝苦しさのなかで耳元でウンウンうるさくて眠れやしなくて。

看護師、兵士たちの残っているだろう手足をさする。

看護師　たまに仕留められたら、手の平に血。

ふらりと飛ぶ蚊を見る。

看護師　なにこれ、パンパンじゃない。どんだけの人、どんだけの血を吸ったの。

看護師、蚊に話しかけてみる。

看護師　そこに私の血も入ってる。

もちろん看護師の血も蚊の体のなかに。

看護師　じゃあ見逃してあげる。私は逃げないから、留まるから、私の血一滴くらいは逃げのびな。どこまでもどこまでも。飛べるところまで。私の血、たったの一滴くらいは、

看護師、何かに気がついてふと空を見た。
まぶしい。

太陽、
を見上げるように。

ドン。

色も光もない、暗闇。

猫 そんな時ね。ワイのヒゲがビリビリしたから、なんか来るって分かってすぐにシェルター nekomimi に飛び込んだんです。すごい音がしたんですよ。ドガンだが、ガバンだが、ドラドラがっしやんだか、なんかわかんないけど、とにかくすごい音。そこですぐにまっくらになっちゃって、シェルター nekomimi も半分くらい吹っ飛んで、一歩先も見えないくらいに真っ暗で、ワイはもうとうとう地球がふたつに割れたんだあって思って、うちゅうってところに放り出されたんだって、思ったんですよ。うちゅうってところは酸素がないからすぐに死んじゃうって長ヒゲの長老が言ってたからワイもこれで終わりだってボロボロ流れる涙を前足で一生懸命拭ってたから、

ひよおおおおおお。

かすかに、風の音。

猫 ちよつとずつ。ちよつとずつね。

ひよおおおおおお。

猫 真っ暗だった目の前がね、こう、闇の霧が少しずつ晴れていくみたいにね。見えてきた。ドガンだか、ガバンだが、ドラドラがっしやんだかなんだかわかんないもんが通り過ぎた痕。

ひよおおおおおお。

銀色黒猫、目の前の風景をじっと見た。

猫 ワイね。これならね、うちゅうに放り出されたほうがマシだったんじゃないかって、思えたのね。もう終わりになったほうがね、ボロボロ泣きながら消えてしまうほうがね、そのほうが良かったんじゃないのかって、思えたの。でもとりあえず毛づくろいしなきゃ落ち着かない。

銀色黒猫、焦りながら長い舌を出した、が。

猫 にぎやんっ！

自分の体を見る。

猫 ワイの自慢の黒い毛皮が、ないのね。

前足も、後ろ足も、背中もお腹も。

猫 つんつるてん、なのね。因幡の白兎みたいにつんつるてん。ワイ黒猫だけど。皮膚しなくて赤くなって、ワイの舌のザラザラが痛くて、ああ。

前足をまじまじと見た。

猫 ワイの自慢の爪も、ないね。吹き飛ばされないように地面を掴んでたから抜けちゃったのかいね。燃えて毛もない。そうか。ニンゲン、ワイみたいに毛皮着てないからなあ。ワイはまだマシなほうかなあ。ヒゲがビリビリしたのは、ワイだけだったのかな。誰もシェルター *nekomimi* に来てなかった。ワイのヒゲは百発百中だかな。みんな間に合わなかったか。

にゃおん、と泣いてみた。

猫 誰か聞こえないかなあ。

にゃおん。

猫 毛皮はなくなっただけ、ワイは生きてるよお。

にゃおん、にゃおん。

泣いているうちに、

銀色黒猫は歌い出す。

ねこのみーこがいました

わたしのでーとはやねのうえ

となりのくろちゃんとかたならべ

むーんらいとのこいのよる

やねのうえからしたみれば

にんげんせいかいはかわってる

まじめにんげんふみんしょう

わるいやつほど

よくねむる

わるいやつほど

よくねむる

（零心会 「零心会のズンドコ節」）

銀色黒猫、ニンゲン世界を見た。

猫 ニンゲンせいかいは、ニンゲンのかたち、もう、してないのね。にゃおおおおおん。にゃッ。

銀色黒猫、爪のない前足で何かを捕まえようとしたが、逃す。

逃げたものが、銀色黒猫の濡れた黒い鼻先にとまった。

猫 お前さん、こんな時でも人の生き血を狙ってるんですかい。

鼻先に止まった蚊がこう答える。

蚊 そりゃこっちゃだって卵育てなきゃなんないから生き延びるのに必死よ。

猫 吸える血はあんなに流れてますよ。

蚊 だからアンタの貰うのよ。

猫 食いしん坊さん。

蚊 卵のために必要なんだから。

猫 ご飯じゃないの。

蚊 吸血鬼じゃないんだからね。主食は草の汁や花の蜜よ。そんなのもう全然ないけど。

猫 えらいキレイなものを食べなさるんですね。

蚊 アンタ、今偏見でものを言ったね。

猫 いやあ、

蚊 草の汁や花の蜜を吸うのはひらひら飛んでるお気楽蝶々のお嬢さん方ばかりじゃないよ。

私が食べるもんがないのはいいのよ。そんなの我慢するわ。でも卵は別。産まなきゃね。産んであげなきゃね。私らは絶滅なんてしないよ。

猫 でも吸える血がなくなれば、かゆーっ！

蚊 どんなもんでも血は血よ。ありがとさん。

銀色黒猫、後ろ足で耳の後ろを掻こうとして、

猫 にぎゃん！

むき出しの皮膚が痛む。

蚊、猫のまわりをフラリと飛ぶ。

蚊 これで次の卵を産めるのよ。

猫 こんな時にですかい。

蚊 こんな時だからよ。

猫 赤と黒と灰色の世界なのに。

蚊 私らに関係あるかい。勝手におやりって感じだね。

猫 ワイは考えちゃいますけどね。

蚊 なにが。

銀色黒猫、にやおおおおん、と大きく泣いた。

猫 誰も答えないここに、ちびっこ猫を作ろうなんて、そんな気にはなれません。

蚊 考えて産んでるわけじゃないのよ。

猫 なんですと？

蚊 だってそれは使命だから。命を作るために命を使うのよ。

猫 哲学ですか。か、

蚊 アンタ、今、蚊のくせについて言いかけたね。

猫 とんでもない。

蚊 血が吸いたいんじゃないわ。吸わなきゃいけないだけ。私が血を一滴吸ったところで誰も死にやしない。お裾分けよ。あれをご覧。

蚊、ニンゲンの世界を見た。

蚊 欲張りすぎるのが命取り。守りすぎるのが命取り。疑いすぎるのが命取り。

猫 それを本能と言うんだとヒゲの長老が言っていましたっけね。

蚊 卵を産んだらそれで終わるしそれが始まり。私はシンプルよ。

猫 みや。

蚊 わかんないか。アンタらはずいぶん人と一緒にいるから毒されてるね。

猫 みにやにや。

蚊 次の卵のなかには私もいるのよ。

猫 なん、です、とっ。

蚊 血の栄養の海のなかに浮かんでいる卵は、私でもあるのよ。

猫 なにを言ってるのか、ワイには分かりません。それがニンゲンに毒されたからなのか、お前さんみたいにメスじゃないからなのか、ワイには分かりませんね。

蚊 ああ、そう、ふうん。アンタの血は、

猫 ん。

蚊 楽しいような悲しいような。

猫 どういうことですかい。

蚊 血が騒いでうるさいのよ。アンタ、いっぴきぼっちになっちゃったんだね。

銀色黒猫、うな垂れた。

猫 それを言っちゃ、いやですよ。言うまい言うまいとしていたのに。

蚊 だって血がうるさいんだってば。

猫 お前さんはいっぴきぼっちだと、悲しくならないんですか。

蚊 あはははははははは。

蚊が笑う声はどんなだろうか。

蚊 私はいっぴきだけど無数にいるわ。

ふうん、と。

また、笑いながら飛んで行く。

猫 ああ、飛んで行きましたねえ。羽があるとは、素晴らしいことです。この赤と黒と灰色の街以外のところまで、飛んで行けるんですねえ。

蚊が飛んで行った方を見る。

猫 静かです。

銀色黒猫、涙が出そうになった。

猫 怖いくらいに、静か。

涙が出ないように前足で目を抑えて、

つぶやくように、歌う。

猫 やねのうえから した みれば にんげんせかいは かわらない かわらないんですねえ。

猫、にやおんと泣いた。

それは悲しい響きだった。

猫 どこにいったのかなあヒゲの長老。トラジマのガンツ。キジトラのジロ。茶トラのマツナ。白猫のハナ。どこにいったのかなあ。路地裏の抜け道。特別な日に集まる中華料理屋のゴミ捨て場。地面からひよろりと突き出たたんぽぽ。見上げれば看板いっぱいの商店街。駐車場の石ころ。一軒家。アパート。ベランダ。屋根。屋根。屋根。どこに、

ひくん、とヒゲが動いた。

猫 ヒゲが、揺れました。

銀色黒猫、耳を立てて澄ます。

小さく小さく、聞こえる。

ミ

ミ

ミ

猫 聞こえますね。

ミ

ミ

ミ

銀色黒猫、そろりと瓦礫のような、ニンゲンだったようなものの上を歩く。

ミ

ミ

ミ

声のするほうへ。

鼻を近づける。

ミ

ミ

ミ

なにか大きな塊を、ゴロンと前足でどかす。
と、

ニイと鳴く、

猫　ちびっこ猫。

見つけてしまった。

猫　こんな、時に。

ニイニイニイ。

よたよた歩いて、ちびっこ猫は銀色黒猫の前足にスリスリした。

猫　いや。こんな時だからか。

銀色黒猫は、生まれたてのちびっこ猫を見る。

猫　お前さん、ワイと一緒に来るか。

ちびっこ猫は、大きくニイと返事をした。

Piece 6 詩 「土曜日、
「イタクシー」

うたた寝

束の間

いつのまにか

夢見てた

昼下がりの窓辺

洗濯機が唸りを上げて

回ってる。

ウウンゴンゴン

ウウンゴンゴン

ウウンゴンゴン

掃除機はまだ途中

うたた寝

束の間

いつのまにか

夢見てた

スーパーの特売セール

忘れてた

急いで行かなくちゃ

お肉200グラムがお安いから

急いで行かなくちゃ

お魚切り身がお安いから

急いで行かなくちゃ

トイレトペーパーがお安いから

サランラップがお安いから

ゴミ袋がお安いから

急いで

急いで

急いで

うああんと泣き声

ぼうやが起きた

あらやだすごい熱

うああんと泣き声

ぼうやが起きちゃった

特売セールが終わっちゃう

だけどヘイタクシー

近くの救急病院まで

急いで

急いで

急いで

ぼうやの熱がすごいから

お願い

急いで

名医がいいの

ヘイタクシー

お願い

急いで

ヤブ医者なら蹴り倒す

ヘイタクシー

パパの夕飯

どうでもいいから

お願い

急いで注射

痛くしないで急いで注射

ぼうやの柔い皮膚に傷をつけないように

痛くしないで

「お母さん大丈夫です。当病院の注射針は、蚊が血を吸うメカニズムの解明により開発された、世界で一番痛くない針を使用しておりますのでどうぞご安心を」

か

か

カ

蚊

うたた寝

束の間

いつのまにか

夢見てた

うたた寝

束の間

いつのまにか

ニンゲンの夢見てた

これはいつの血の記憶

これはあの時の血の記憶

ぎゅんと吸い上げたあの一滴

ニンゲンの

母親の

女の

いつかの血

いつかの記憶

Piece 7 記憶 蚊

蚊 私の記憶じゃないわ。

ぶうんと飛んだ。

蚊 うっかり寝ちゃった。ああ、寝てる間も血が騒いでうるさい。吸えば吸うだけうるさいわ。私の血の胃袋はスクランブル交差点かっていうの。しょうがないか、卵のためよ。出来るだけなんのヘンテツもないボーッとした人の血にしようと思ってるけど山も谷もない人ってイガイといないのよなんかあるのよ。誰でも人生ジェットコースターだし誰でもグジグジ考え込んでるし、ああ、吸った人の数だけ血がうるさい。あ。

蚊、血の声を聞いてみる。

蚊 あの猫、どうしたかな。

しかしすぐに我に帰る。

蚊 や、休んじやられない。早く次の血探さなきゃ。ああ、忙しい忙しいそが、

ひらりと、舞い踊るドレスが見えた。

鼻歌うたって飛ぶアサギ マダラ。

蚊、なんだかカチンとくる。

蚊 ちよいと。

蝶々 はい。

蚊 当たったよ。

蝶々 え、なにが。

蚊 なにがじゃない。そのドレスの先。

蝶々 あ、羽。

蚊 当たったつつてんの。

蝶々 ごめんあそばせ。

蚊 遊んでんじやないよ。こっちは生活してんだからさ。

蝶々 当たっちゃってごめんなさい。でも当たられちゃったわ。

蚊 今なんつった。

蝶々 生活に追われてピリピリしてらっしゃる方は当たる対象がいりますものね。いいんです。受け入れますその苦勞。

蚊 あんた。

蝶々 はい。

蚊 丁寧に感じが悪いね。

蝶々 おほほ。

蚊 あんたはいいね。綺麗な服きて歌なんか歌って舞い踊ってりやそりや人生楽しいでしょうよ。

蝶々 隣の芝生はなんとやらと言いますものね。

蚊 こっちは生きのびるのに必死なのに。

蝶々 他人様の血を泥棒なさっているんですものね。卑屈な考え方になりますわ。

蚊 え、なにいまの。

蝶々 蝶には花。花には蝶。美しさと儚さの象徴ですもの私たち。

蚊 花の蜜くらい私らだって吸うよ。

蝶々 みんな血吸って生きてると思ってるわよ。だって絵にならないから誰も知らないじゃない。

蚊 えええ。

蝶々 ダジャレはキライよ。それおじさんの専売特許だから。

蚊 ダジャレじゃないよ。なんで絵になるかならないかが重要なのよ。

蝶々 だって、花には蝶だってイメージ強いから。

蚊 え、だからなに。

蝶々 イメージ、壊しちゃ悪いじゃない。

蚊 は。

蝶々 生きのびるのはお互いさまでしょ。でも蝶々が必死になって頑張って歯食いしばるところなんて誰も見たくないから。見えないところで踏ん張るの。卑しきむき出しのそちらさまには理解できないことですが、だから隣の芝生はなんとやら、でございますのよ。ほほ。

蚊 なんか。

蝶々 なに。

蚊 なんかむかつく。

蝶々 それが卑しさというものですわ。もう行かなきゃ。大陸を渡るの。大勢でね。ほら見て。

蚊、空の向こうからやってくる蝶の大群を見る。

蚊 なに、あれ。

蝶々 旅が始まります。

蚊 旅。

蝶々 春から夏にかけて南から北へ。

蚊 そんなに、

蝶々 秋になったら南下する。2000キロの旅。

蚊 なんだってそんなに飛ばなきゃなんないの。

蝶々 使命ですもの。命を使って飛ぶの。海の上を。

蚊 海を、越える。そんなことでき、

蝶々 出来るの。

蚊 そんなに飛んでどこに行きたいの。

蝶々 行きたいんじゃないわ。生きることが飛ぶことよ。高尚すぎてごめんなさい。あなたには

分からないと思うわ。

蚊 もれなくカチンとくるね。

蝶々 普通に話しているだけなのに。

蚊 京都人の喋り方にカチンとくる大阪人の気持ちみたいだよ。

蝶々 わかりにくい譬えだこと。

蚊 だったら横浜の人のことをカチンとくる関東の、

蝶々 よしなさい。苦情がくるわよ。

蚊 雨だって降るだろう。

蝶々 そりゃ降りますわよ。

蚊 海だって荒れるだろう。嵐だって、

蝶々 耳を澄ませばいつなにが起こるか分かるもの。耳を澄ませば未来が見えてくるもの。嵐を止めることはできないけど、嵐を乗り越えることは出来るものよ。出来るだけ遠くを見据えるの。嵐が去ったあとの空を飛ぶのは爽快よ。

蚊 あんた、

蝶々 なに。

蚊 ドレス、そこ、汚れてるよ。

蝶々 ああ、違うわ。マーキングよ。

蚊 マーキング。

蝶々 嫌な臭いのする何かで書き込まれるのよ。

蚊 は。

蝶々 知りがりの人間が私を捕まえて書きこむの。

蚊 なんです。

蝶々 だから、知りたいのよ。なぜ私たちが旅をするのか。私たちがどんなふうにいるのか。私たちがどこでどうやって死ぬのか。

蚊 え、知ってなにがどうなるわけ。

蝶々 それは人間に聞いてくださいな。

蚊 へえ。つくづく、妙な生き物だね。

蝶々 分かるわけないわ。

蚊 え。

蝶々 私たちが2000キロの旅の果てにどこに行き着くのか。分かるわけがないわ。海を越え、国境を越え、空を越え、あの景色を、あの瞬間を、人間なぞに見えるものですか。

蚊 2000キロの、旅の果て。

蝶々 今いくわ。待ってて。

蝶々、大群に声をかけた。

蚊 私も。

蝶々 え。

蚊 私も海を超えられるかな。

蝶々 だってあなた、蚊でしょ。

蚊 そう、だけど。

蝶々 使命が違うでしょう。

蚊 そうだけど。

蝶々 今はね。

蚊 え。

蝶々 今は無理でも、いつかね。

蚊 いつか。

蝶々 いつか、あなた、蝶々におなりなさいよ。

蚊 私は蚊で、蝶になんかなれやしないよ。

蝶々 なれるわよ。

蚊 バカにしてるね。なれっこないってバカに、

蝶々 違うわ。

蝶々、仲間の蝶の大群に聞かれないようなのか、少し小声になった。

蝶々 教えてあげましょうか。秘密よ。絶対に絶対に秘密で謎よ。誰も解明なんて出来やしない謎。あのね、

蝶々、蚊の耳元でささやいた。

蝶々 わたしもその昔の昔、蚊だったことがあるの。

蚊 え。

蝶々 蚊の次は、人間の女でね、永い間眠ってたから。その次に蝶々になったの。秘密だけど、そんな記憶があるのよ。

ぱたん。

急激に暗闇。

蝶々の姿も見えない。

蚊は、

暗闇に一匹つきり。

蚊 え。

蝶のその言葉を最後に、蚊は手の中の暗闇の檻に閉じ込められる。

蚊 え。

人肌の暖かさの檻。

蚊 え、やだ、ここ、

人間の皮膚の匂いがする。

蚊 まだ潰されてない。助かってる。

大人の指の大きさ。

蚊を包んで閉じ込めている、両手のひら。

蚊 ていうか、なんで潰さないの。

海を渡る。

旅する蝶たち。

まるで紙吹雪のように。

飛ぶ。

飛ぶ。

飛ぶ。

飛ぶ。

空の青色と、

海の青色の境目を、

旅する蝶々、

アサギマダラの大群が飛んでいく。

半透明の水色の羽。

空と海の色。

海の波の水しぶきのようにも見える。

空が千切れていくようにも見える。

はるかな旅の果てに向かう蝶の大群を見つめる、

ひとりの女の後ろ姿。

じっと見つめる。

その女は両手のひらを隙間なく合わせている。

少しだけ出来た手のなかの空間に、

ぶうん。

あの蚊を閉じ込めている。

蝶の大群がすっかり見えなくなると、
女はくると振り返り向いて椅子に座り、

顕微鏡を覗き込んだ。

Piece 6 記憶 研究者

先生 血だね。

机には顕微鏡。

蛍光スタンドがひとつ。

部屋の明かりはそれだけ。

薄暗い。

先生 血の記憶。

覗き込む顕微鏡には、あの蚊がいる。

先生 大丈夫。パチンとやりやしないよ。調べたいだけ。

先生、蚊を1000倍に拡大して見て軽いため息をつく。

先生 ふうん。怯えてるの。蚊なのに。殺されると思ってるの。蚊なのに。不思議ね。蚊にそんな思考回路があるはずもないのにどうしてこんな気分になるのかしら。おかしいのね、きっと、もう私がおかしいんだわ。蚊にも怯えられるなんて。殺しやしないわよ。あんたのその血の溜池胃袋をちよっと調べたいだけ。一滴の血から記憶が再生される装置をね、今、作ってるの。心臓移植で記憶までもらっちゃうって話、あるでしょ。科学的根拠は全くないけど。「細胞記憶理論」「組織的記憶理論」もうオカルトね。でもねよく考えてみて。移植手術だって江戸時代からすればオカルトみたいなもんでしょ。脳外科だって頭蓋骨くり抜くのよ。野蛮極まりないはずよ。でもそれが世界の常識。そう、世界基準。あやふやだわ。世界なんて。基準なんて。すぐに変化するしすぐにひっくりかえる。研究者はね、ひっくり返ることをするって決まってるの。だからいいのよ。ひ、科学的。根拠ナシ。繰り返し言われたって平気よ。必ず科学的にしてやるから。必ずね、根拠見つけてやるから。記憶は内側よ。いつからか人は記憶することを自分の体の外に置くようになったって、それが間違いのもとよ。いくらデータにしてパソコンに入れたってね、いくら写メしたってね、動画撮ったってね、それを撮ったことすら忘れちゃったらどうするの。自分のことをいくら書き残したって、それを書いたことを忘れちゃったらどうするの。いつから内側見ること忘れちゃったの。記憶はこの体の中を巡るものよ。この体を動かしているのは「私」の意思よ。私のことを「私」と思っている足が、手が、髪が、爪が、産毛か、それらを作る細胞のひとつひとつが「私」この体の全部が、私。記憶を、再生させる原動力はこの体から。だから一滴の血から始めるの。血に記憶があるか。希望、そうね、希望的観測。でも希望はいつだって無謀でしょうよ。機械は思い出さない。手伝うだけ。だから血。思い出すのは、「私」でなきゃ。忘れる前に完成させなきゃね。私が「私」を忘れてしまう前に。私、「私」を。

先生、ぼうっと空を見る。

あの蝶々の大群が通り過ぎたような気がしたのかもしれない。

先生 あ。

手元の顕微鏡を見る。
が、

先生 何の、研究、しようと、してたんだっけ。

引き出しからパソコンを取り出し、

先生 やだわ。物忘れのレベルじゃないわこんなの。この前の研究はもう終わったはずだから、えーと、新しい研究データをここに、

電源を入れるが、

先生 パスワード。

手が止まる。

先生 やだ。パソコンのパスワード、何だったかしら。

今度はスマホを取り出して、

先生 良かった。パスワードアプリ入れておいて。

人差し指で操作する。

先生 やだ、このアプリもパスワード聞いてくる。え、アプリのパスワード何にしたかしら。
もう、こんなのパスワード地獄だわ。

操作してみる。

先生 やだ違う。

もう一度操作してみる。

先生 やだこれじゃないの。

もう一度操作してみようとして、

先生 なんのパスワード探してるんだっけ。

先生、機械に頼らないことにした。

先生 もしもし。あのね、ヨーク。ちょっと聞きたいんだけど、お母さんね、この間あんたに電話して研究の話したでしょ。それ、ほら、何の研究するって言ってたっけ。覚えてる。

電話の向こうの声は戸惑う。

先生 え。

先生 あ、やだ、セイジさん。あ、あらそう。お久しぶり、なの、かしら。あの、ヨーク、

少しだけ記憶が戻ったのか。

先生 あああ、そうね。ごめんなさい。ヨーク、もう、5年になるのに。ごめんなさいね。私っ
たら。ほんとに。うっかりしちゃって、まだ、生きてるみたいな、気持ちになるの。今でも、今
でもね。

話を合わせただけなのか。

通話終了をタッチする。

人差し指を動かして、

スマホのなかの写真をめくる。

先生 ヨーク。

じっと見る。

先生 こんな、顔だった、かしら。

分からなくなる。

動画も幾つか再生してみる。

「これが初めての一人暮らしの、初手料理です」

スマホから聞こえる。

「カレーを、作ってみましたー」

「結婚式前日の、すっぴんの花嫁です」

『新婚旅行にきています』

先生　こんな、声、だったかしら。

スマホから流れるリアルそのものをいくら見ても。

先生　分からない。

ぼんやりと、立ち尽くす。

なぜ自分が今悲しいのかも、

先生　分からないわ。

机の上に顕微鏡。

そこに研究対象として、ガラス板に小さな黒い点。

蚊がへばりついている。

先生　蚊。

ガラス板を手取る。

先生　どうして蚊なんか見てたのかしら。

蚊が、ふらりと飛んだ。

Piece 10 風景 鐘

ゴオオオオオオオン。

除夜の鐘が響く。

女主人、目を冷ました。

なんだか胸がドキドキしている。

たくさんの、

誰かの人生を夢みて、

今、人生が終わったように、

胸がドキドキしている。

窓の外。

夜の帳が下りている。

闇のなかでもあの常葉樹は緑色に光る。

除夜の鐘が何度目の音なのかも分からない。

けれど、

新しい年がやってきたことは確かだ。

テレビをつけると、

「明けましておめでとうございます」

と、アナウンサーやタレントが連呼する。

女主人、チャンネルを変える。

「明けましておめでとうございます」

女主人、チャンネルを変える。

「明けましておめでとうございます」

女主人、チャンネルを変える。

砂嵐。

女主人、チャンネルを変える。

「明けましておめでとうございます」

女主人、チャンネルを変える。

砂嵐。

女主人、チャンネルを変える。

「明けましておめでとうございます」

チャンネルを変える。

「明けましておめでとうございます」

チャンネルを変える。

砂嵐。

チャンネルを変える。

「明けましておめでとうございます」

砂嵐

「明けまして」

砂嵐

「あけま」

砂嵐

「あけ」

砂嵐

「あ」

ザ ザ ザ ザ ザ ザ ザ ザ

リモコンを操る指先に、

丸々と太った蚊が、ヨタヨタと止まった。

女主人 あたし。

テレビの音が小さく小さく聞こえている。

女主人 へんね。あたし。あたし。あたし、あたし、ねえ、あたしあたしをずっと言い続けていたら「あたし」ってなんなのか分かんなくなるわよね。子どものころに「かまぼこ」って言葉を初めて聞いて、へえかまぼこって何、って思ってたかまぼこ言い続けてたら、かまぼこの言葉の意味がもうどっかにいっちゃって、目の前のかまぼこ「かまぼこ」って言葉が全然合わなくて、

自分が誰かに話しかけているのに気がついて。

女主人 やだ。

女主人 また独り言。

女主人 まだ慣れないから。

ぐるりと部屋を見渡す。

女主人 ひとりじゃ広いのよね。

女主人 指先に止まる蚊を見た。

女主人 ああ、そうね。お宅に話そうかしらね。

指に小鳥が止まっているみたいに、

女主人は優雅に手をあげる。

蚊なのに。

女主人 夢をね、たくさん見たのよ。あたしがね、お宅みたいな一匹の蚊になってるのね。ひよろひよろ飛ぶの。飛んで飛んで、いろんな人の血を吸ったわ。看護師さんとか、猫とかね、もうああいう血は見たくないのね。母親もいたわね。キャリアウーマンみたいな人もいたっけ。それから、ああ、蝶々に出会ったわ。海を渡る旅する蝶。羨ましいって、思うのよ。そしたら、

蚊が、指から飛んで、今度は反対の手首に止まる。

女主人はそれを目で追う。

女主人　なんて言ってたかしらね、あの蝶々。

窓の外の常葉樹が風に揺れる。

女主人　秘密の、謎の、話をするのよ。なんて言ってたかしら。その時あたしはね、あ、あたしっていうのは夢の中ではお宅になるんだったわね。お宅はね、いや、あたしはね、ややこしいわね、夢って。その時、その一匹の蚊はね、蚊が蝶になんかなったりするもんかってむかついているの。でもね、なれたらいいな、とも思ってるのね。そんで、なんでなれないって思うんだろうって考えるの。なれないって決めつけるのと同じくらいの強さで、なれるって決めつけてみたら何か変わるのかなって、

女主人、蚊をじっと見る。

女主人　お宅、面白いわね。いろんな人のところに行けて。テレビのチャンネル変えるみたいに誰かの人生垣間見てるんですよ。スリリングね。ああ、でも潰される危険と隣合わせか。それもなかなかやっかいでスリリングだわね。

ふっと、蚊が飛んだ。

女主人　あ、きた。きたきたきたわ。痒い。

ぽりぽりと搔く。

女主人　これであたしの人生も垣間見られちゃったってことね。

ぽりぽり。

女主人　あたし。

ぽりぽり。

女主人　あたし。

ぽり、ぽり、

女主人　あたしの人生。

女、考えてみる。

女主人 痒い、と思っているのは、あたしで、いいのよね。あたしが、蚊になつてゐる夢を見てたのよね。

女主人 それとも、一匹の蚊の血の記憶の中にあたしがいるの。

女主人 どっちかしら。

女主人 どっちがホント。

女主人 でも、どっちでもいいわね。

女主人 たくさんの人を生きられたんだから。

女主人 次は何になれるかしら。

女主人 誰の、どんな時間を生きられるかしら。

女主人 そう思うと、面白いわね。

蚊、

ふわふわと女主人の目の前を浮遊すると、
やがて、

女主人の人差し指の上にちょこんと乗る。

息で蚊を吹き飛ばさないように、

女主人、

ひそやかに歌う。

胡蝶の夢

ならぬ

蚊となる夢を見た

夢がわたしか

わたしが夢か

蚊がわたしか

わたしが蚊なのか

さあ誰が答えられるか

瞼閉じたあとのこと

さあ誰が答えられるか

昨日の記憶

誰が教えてくれるか

わたしが夢か

夢がわたしか

蚊がわたしか

わたしが蚊なのか

どこから来て

どこへ行くのか

瞼閉じたあとのこと

さあ誰が

女主人、ふと、人差し指に乗った蚊をみる。

女主人 あら。一休み。

ではなく、

女主人 あ。

動かない。

女主人 ちよつと。

動かない。

女主人 お宅、まだ卵産んでないんじゃないの。いいの。ちよつと。

動かない。

女主人 そう。

女主人、息で蚊を飛ばさないように気遣う。

女主人 季節外れ、だものね。

女主人 一寸の虫にも五分の魂よ。

女主人 お宅、一番最後にあたしの血を吸ったのね。さぞかしうるさかったでしょう、あたしのは。忙しかったでしょう。穏やかじゃなくてごめんなさいね。でも悪くないですよ。お宅と同じくらいいろんな人の人生生きてきたんだもの、そりや騒がしいと思うわ。あら、でも。

女主人、考える。

女主人 あたしのほうが、一匹の蚊の、一滴の血の記憶の中で生きているなら、

女主人 蚊があたしか、あたしが蚊なのか、あたしが夢か夢があたしか。

女主人 さあ誰が、答えられるか。

ゴーンと除夜の鐘。

らしき音がしたが、

女主人は窓へと目を向ける。

女主人 むこうの空が、赤い。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

と、

除夜の鐘らしくない音がする。

女主人 血みたいだわ。

女主人、ゆっくりと目を閉じてソファに横たわる。

Piece 12 詩

「瞼の宇宙」

明日の太陽

ま

ま

ま

ま

ま

まぶしさを

い

い

い

い

い

いつ見たか

そ

そ

そ

そ

そ

その記憶

だ

だ

だ

だ

だ

誰がわたしで

わ

わ

わ

わ

わ

わたしが誰か

あ

あ

あ

あ

あ

あかい血潮

め

め

め

め

め

めぐる体は、

めぐる体は、

呼吸を止めた

わけ

じゃない

閉じた瞼のなかでビッグバン

ガスと塵の隙間

燃えた星屑の残りカス

渦巻き天の川のささくれ

ギラリ光る稲妻の火花

溶け始めた彗星の水滴

原子の海の奥底

食べて食べられるミトコンドリア

2本の螺旋の鎖

クリオジュニアン

ディアカラ

カンブリア

オルドビス

シルル

デボン

石炭

ペルム

トリアス

ジュラ

白亜

閉じた瞼のなかで46億

永遠に一瞬ばかり

めぐる体は
呼吸をとめた
わけじゃない

めぐる
のびる
たかく
うずまく

人差し指
から芽吹く

緑

閉じた睫毛は
鳶のように

めぐる
のびる
たかく
うずまく

めぐる体は
足の指の爪を伸ばして
大地に根をはる

めぐる
芽吹く
のびる

鳶
たかく
枝
うずまく

葉脈
静脈
動脈

閉じた瞼のなかで46億

永遠に一瞬ばかり

どのくらいの時間が過ぎたのか。

誰も知らない。

そこに古びた洋館があったことなど、

誰も知らない。

ましてやその窓辺に、

この洋館の女主人がいたことなど、

誰も誰も知らない。

どのくらいの時間が過ぎたのか。

佇むのはあの常葉樹ただ一本。

しかしそのままの姿ではない。

もっと枝を伸ばして、

もっと濃い緑色の葉を宿し、

大地をがっちりと掴むような根っこが

地中深く広がっている。

もし、

この常葉樹の幹の皮を

ナイフでそっと剥がしてみたならば、

きっとあの女主人の寝顔が見られるだろう。

この常葉樹は、

永い永い時間をかけて、

瞼を閉じて横たわった女主人のベッドになった。

永い永い時間は、

人間の時間を超えて。

何度目かの氷河期さえも超えて。

誰もいない。

人間の姿は、たぶん見えない。

なぜそうなったかくらいは、

想像がつくだろう。

錆びてもうその形を止めていない鉄くずに、
緑の蔦が絡んで伸びる。

それはかつて車だっただろうものは、
微生物たちの住処となる。

女主人の常葉樹の枝に、

鳥たちがやってきて一休みする。

盛り上がった根っこを枕に、

獣たちが昼寝をする。

根っこが地中から水を吸い上げて、

一番先の葉まで行き渡らせる。

しかしこの常葉樹には、

確かに赤い血が流れている。

呼吸を止めたわけではないから。

血は、止まることなく巡り続ける。

だから生き物たちはその温度に寄り添う。

冬でも葉をつけたままの常葉樹。

いつまでもいつまでも葉が落ちない。

雨が降れば獣たちの屋根となる。

女主人の常葉樹はいつも空を見上げている。

まるで空からやってくる何かを待っているように。

見上げている。

と、

誰かがこの常葉樹を見たなら、

そんなふうに思うだろう。

その時、

常葉樹の一番てっぺんの、一番緑色が濃い葉っぱが一枚、

震えた。

何かがやってくる気配がした。

鳥も獣も常葉樹も身構える。

ザ。

ザザザ。

ザザザザザ。

海の向こうからやってくる。

海の波の水しぶきのようにも見える。

空が千切れていくようにも見える。

空の青色と、

海の青色の境目を、

旅する蝶々、

半透明の水色の羽を持つアサギマダラ。

2000キロの旅する蝶々たち。

鳥や獣が見上げるなか、女主人の常葉樹の上を飛んでいく。

ひらりと、

一匹の蝶が大群から外れた。

あの震えた常葉樹のてっぺんの葉に留まる。

蝶は羽を震わせる。

ドクン。

ドクン。

女主人の常葉樹が呼吸するのに呼応するように。

水色の羽を震わせる。

一匹の蝶、

緑色の葉の先についた雨粒を飲んだ。

それからひらりとまた飛んでいく。

さて、あなたには見えるだろうか。

今飛び去った一匹のアサギマダラ。

あの半透明の水色の羽に、うつすらと流れ始めた赤い血が。

見えるだろうか。

海を越え、

国境を越え、

空を越え、

あの景色、

この瞬間、

旅の果てにどこに行き着くのか。

見える。

見える。

見える。

おしまい